

# 学びの源泉 三谷 宏治

第 10 号 旅に学ぶ—日本（寺社仏閣編）（後編）

## #見つめ続けること：山口 瑠璃光寺 五重塔

前は <sup>かん</sup> 匏 とか <sup>おのおのこぎり</sup> 大 鋸 とかの話に始まって、薬師寺、三十三間堂の話をした。

道具の進化が建築形態を変え、文化そのものにも大きな影響を与えたこと。薬師寺という <sup>だいがらん</sup> 大伽藍を構築・再建するに至った人々の強烈なる意思の力のこと、特に高田管長の <sup>しやきようかんじん</sup> 写 経勸進に掛けた執念と、西岡棟梁の教えについて述べた。

「親方に授けられるべからず」

三十三間堂では仏像の話色々。特に仏教に取り込まれたバラモンの神々（<sup>かるらおう</sup> 迦楼羅王とか）の話などをしたが、これらに見つめられての場の雰囲気こそが主題であった。

時間をゆっくりにして、自分を見つめ直すに最適のところだ。

さて、もう一つ、稀有なる仏塔を紹介しよう。

山口県山口市山口駅から車で 6 分、1442 年 <sup>らっけい</sup> 落慶のものだ。九輪の先端まで 31m、割と大柄の、しかし非常に優美な五重塔だ。

最大の特長は、屋根が <sup>ひわだぶき</sup> 檜皮葺であること（他には <sup>むろうじ</sup> 奈良 室生寺、<sup>いくつしま</sup> 広島 厳島神社、<sup>はせでら</sup> 奈良 長谷寺など）。

文字通り、ヒノキの樹皮で葺かれた屋根なのだが、<sup>ひ</sup> 葺くにも維持するにも大変お金の掛かるものである。

檜皮は樹齢 80 年以上のヒノキから、樹皮を剥がすことで採取する。

そもそも重要文化財の檜皮葺の建物だけでも 700 棟、その維持に年間 3,500 m<sup>3</sup> の葺き替えが必要というのに、大きなヒノキそのものが日本には少なく、かつ、採取の職人さん（<sup>もとかわし</sup> 原皮師）も減少で、

大変な状況なのだ。

実はこれは昔も大して変わりなく、大変高価で人手が掛かるため、ある地位以上の者しか家を檜皮葺にすることは許されなかったという時代もある。

それでもその圧倒的な美しさ故に、多くの古寺、古塔で用いられてきた。

そう、ここで言いたいことは、この瑠璃光寺 五重塔の美しさなのだ。そして私はそれに魅入られた。

近くに寄ったり、ちょっと離れた。だいたい距離を取って回りの風景と一緒に見たり。もちろん途中で飽きたりもする。でも、見続ける。結局、延べ 5 時間ほど眺めていた。

そして、じーっと見続けていると、次々に色々なものが見えてくる。それまで見えなかったものが見えてくる。

綺麗に反った軒の先に揺れる <sup>ふうたく</sup> 風鐸、屋根を支える複雑な木組み、下二重にだけある <sup>こうらん</sup> 高欄、軒が深く塔自体はかなり細身であること等々。

今までもそこにあって風に揺れ、音を出していたのに気が付かなかった風鐸。一旦眼にはいると 4 隅 × 5 段、20 個の風鐸が急に大きな存在感をもって迫ってくる。

小林秀雄は、美の鑑賞は修行である、と言った。そして、ただ見続けよと。それは苦しく、時には退屈なものであるが、見続けることで「それ」は見えてくる。

私が二十歳の夏に経験したことは、そんなことであつた。

## #遠くを見つめること：東大寺 戒壇院 四天王像

今回の本論である、四天王像の話に移ろう。

東大寺と言えば大仏さま(盧舎那仏)。でもそれだけじゃない。この東大寺という大伽藍は凄い。

入

り口である南大門には左右に、運慶・快慶・湛慶(運慶の長男)らによる巨大な仁王さま。大仏殿の右手にはお水取りで有名な二月堂。近くの法華堂には三目八臂の不空罽索観音像に月光菩薩像。奥には宮内庁直轄の正倉院。まさに国宝のオンパレードだ。

そして大仏殿裏から左側へ数分歩いて下ると、戒壇院 戒壇堂だ。

ここはメインコースから離れているのでいつも静か。この戒壇堂の中にそれは存在する。

戒壇院 四天王 広目天立像。

四天王とは仏の住む須彌山の四方を守る神様である。東を持国天、南を増長天、北を多聞天(毘沙門天)、そして西を広目天が守護する。

広目天の梵名ヴィルーパークシャとは、「通常でない眼を有する者」という意味であり、額に第三の眼を持つヒンズー教の主神シヴァも同じ名で呼ばれる。

戒壇院の広目天は邪鬼の上にしっかり静かに立ち、左手に巻物を、右手に筆を持っている。そして眼を細め、眉を寄せ、遙かなる彼方をひたと見つめている。

その視線の厳しさと視点の遠さは例えようもない。一体、何億光年の彼方を見ているのだろうか。一体、何を見、書き留めようとしているのだろうか。

私とその姿を最初に見たのは、カメラマン 土門拳氏の写真集でだった。衝撃だった。

これまで感じたことのない力を、一枚の仏像の写真から感じた。土門拳とはなんたる写真家なのか。自分がその仏像を直に見たとき、彼が描ききった本

質を自分も感じることが出来るのだろうか。不安に感じるほどだった。

でもそれは杞憂だった。

広目天像は静かにそこにあり、静かに遠くを見つめていた。

優美な戦闘服に身を包んだその神将の視線はあくまで遠く、あらゆる衆生のものたちの何千何万年にわたる争いを、ただ慈悲を持って見つめ続け、書き留め続けているように思えた。

「私は見ているよ。どの一つの生も死も、見逃さず。そして書き留めることで、それに証しと意味とを与えよう」

全てを見守り続けることの苦しみや悲しみは如何ほどのものであろうか。しかしそれを圧倒的な雅量で包容し、優雅に邪鬼を踏みしめ、遠くに視線を向けたまま巻物に筆を走らせる。

## #色即是空、空即是色

かの広目天のように、数億光年の彼方から、自分の行いを見つめてみよう。回りの全てのものも含めて。上司も部下も同僚も、会社も競合他社も、家族も友人も隣人も。みんなまとめて遙か遠くの高い場所から眺めてみよう。

ヒトの細かい悩みなど、その彼方から見たとき、如何ほどのものであろうか。しかし同時に、どの一つとして、無意味なものは、無い。

色即是空、空即是色。

すべての存在には一切これと言う実体が無い。執着するべからず。しかしながら、実態が無いながらもそれぞれの存在には意味があり、光り輝いている。存在(命)はただそれだけで尊いのだ。

これは決して宗教としての仏教の勧めではない。  
ヒトの生きる<sup>ちえ</sup>智慧と哲学としての言葉だ。自ら吟味し、考えて欲しい。

どう生き、どう死ぬべきか。決められるのは自分自身だけである。

#### 旅リスト（四国編）

- ・ 高松 栗林（りつりん）公園（広大な園には数々の名所。借景の紫雲山が美しい。夏は 5 時半開園、早朝散歩に最高）
- ・ 四万十川（しまんとがわ）（日本最大の清流。水底には鮎がキラキラ。欄干のない沈下橋はスリル満点）
- ・ 松山 道後温泉本館（坊ちゃん湯、あります。朝 6 時の一番湯争いに加わってみます？コワイですよ）
- ・ 高知 桂浜（坂本竜馬の銅像が太平洋を望む。言わずと知れた竜馬ファンの聖地）
- ・ 香川 琴平町 金刀比羅宮（奥社までは 1368 段。金毘羅は梵語でワニのことであり海上の守護神。故に絵馬殿には「海上安全、大漁満足」の絵馬が一杯）
- ・

初出：CAREERINQ. 2005/11/01